

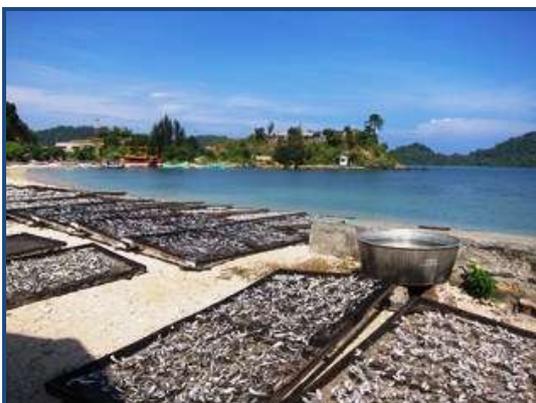
東松島復興推進員だより（第15号）

～地を往きて走らず～

今から 9 年前のスマトラ沖地震による大津波は、インドネシアの北西に位置するアチェ州に多くの犠牲者をもたらしました。人口 26 万人のバンダ・アチェ市では 6 万人近く、おおよそ 4 分の 1 にあたる住民が亡くなったそうです。JICA の支援をきっかけに、東松島市とバンダ・アチェ両市は、相互の復興を目的とした人的な交流を続けており、JICA 研修員として今年 3 月からバンダ・アチェ市役所職員 2 名を「東松島みらいとし機構」にて受け入れています。我々推進員は集団移転事業における住民合意形成のプロセスや震災遺構保存による伝承等について「先輩」であるアチェから学べることがあると考え、4 月に現地を訪問し研修を実施しました。また、今回は地元紙 河北新報の防災特集企画「むすび塾」の一環としてアチェと宮城県内の被災者によるワークショップを開催するため、河北新報社記者・カメラマン、ワークショップコーディネーターの先生に加えて 3 名の被災者の方が同行しました。

ジャカルタから国内線で約 4 時間、バンダ・アチェ市に到着しました。気温は 30 度近いですが、蒸し暑くはありません。食事もスパイシーで美味しく、ビールが飲みたくなる・・・のですが、アチェはインドネシアに初めてイスラム教が上陸した地なので、厳格な信者も多いため、お酒は入手困難です。

その代り、現地の方は甘いフルーツジュースや地元産コーヒーをよく飲むようです。どちらも美味しい！



豊かなアチェの食



豊かなアチェの海

ワークショップでは、スマトラ沖津波で被災した住民が、当時を思い起こしながら体験談を語るうちに感情的になっていきました。9 年経過しても心に深

い傷を抱えているようであり、同じような悲しみを経験した日本人が来たことで、普段抑えている感情が一気に噴き出したのでしょう。東日本の被災者の体験談も真剣に聞いてくれて、最後には暖かい励ましの言葉をかけてくれたので、3名の被災者の方はとても感動した様子でした。また、上記にあるように敬虔なイスラム教徒が多い土地なので、宗教が心の支えとして大きな役割を果たすと同時に、被災を「神から与えられた試練」と捉える人が多く、それが積極的な防災体制の整備の障害になっているようにも見受けられました。

バンダ・アチェ市内の中学校を訪問した際には、生徒達から大変な歓迎を受けました。以前の校舎は津波で流されましたが、日本政府の支援で再建されています。日本との繋がりもあり、私達を伝統音楽やダンスで歓迎してくれました。さらに、日本語の歌の合唱もあり、五輪真弓の「心の友」を歌っていただきました。インドネシアでは誰でも知っている国民的唱歌との事。私は初めて聞きましたが・・・生徒達は皆明るく、日本の子供達と変わりません。しかし、ここでも約500人の生徒のうち、津波から生還できたのはわずか73人だったそうです。本当に大変な被害であり、二度と起ってはならない事と改めて思いました。



中学校にて



子供たちによる歓迎

何故、これだけ多くの方が亡くなったのでしょうか？

現地の方の話によると、震災以前は「津波」の現象自体、知らなかった人が多かったそうです。漁師でさえ知らなかった。大きな揺れの後に、海の近くから避難せず津波にのまれた人が多くいたのです。過去にも何度か津波は発生したにも関わらず、地域での伝承や防災教育がおこなわれていなかったのでしょうか。対照的な例として、震源から近いシムル島では10m近い津波に襲われましたが、8万人の人口の内、死者は7名だけでした。ここでは地元の子守唄や叙事詩に過去の津波の事が歌われており、代々歌い継がれていたため避難できたとの話を聞きました。防災教育の重要性を痛感し、アチェ市の行政や教育関係者との意見交換の場では、津波防災は警報や監視装置を整備することより、「高い所に逃げる」重要性を徹底して周知、教育することと発言させて頂きました。



津波の傷跡



元気な子供たち

アチェでは打ち上げられた船や破壊された病院等の震災遺構が多くあります。これは行政主導で保存されているようで、近隣の住民も「当時を思い起こさせて辛くなるが、津波被害を風化させないために残すことに合意している」と言っていました。これらの震災遺構は今やアチェの観光スポットにもなっているようです。日本では賛否が分かれています。今後の被災地での観光振興や防災教育を考えると、アチェの例から学ぶところは多いと思います。

また、住宅再建については2年余りというスピードで完了しましたが（他国の政府、NGOより無償の住宅提供がおこなわれた）、地域経済の再生やインフラ整備等を5年で成し遂げるという目標については、あまりにも短すぎ、倍の10年は必要だという意見を多く耳にしました。震災前から経済の疲弊、高齢化が進んでいた東北沿岸の被災地では、それ以上の長い時間が必要になるのかもしれない。



保存されている震災遺構



保存されている震災遺構

【インドネシア版「むすび塾」 掲載紙面：JICA 東北ホームページ】

<http://www.jica.go.jp/tohoku/enterprise/shinsai/index.html>

【推進員だよりバックナンバー：JICA東北ホームページ】

<http://www.jica.go.jp/tohoku/enterprise/shinsai/index.html>

以上

JICAは、宮城県、東松島市、宮城大学、東松島まちづくり応援団（NPO）等と共同で「地域復興推進員」を通じた震災復興モデル事業を東松島市で開始しました。このモデル事業では、早期震災復興につながる”市民協働のまちづくり”を支援することを目指しています。ここで得られた教訓や経験を将来の国際協力に繋がります。
